

# 松前藩における商業資本の

## 成長と蝦夷叛乱

佐々木悦夫

### 一、松前藩における商業資本勢力の成長

#### 1. 商人の渡来及び場所請負制

松前藩内の住民が本州からの移住者か或いはその子孫であることはいうまでもないとして、地理的関係から又て彼等の出身地はいわゆる辺境の地、奥羽地方が大部分を占めていたと見てよい。従つて、松前藩が原始産業の独占を維持するため及び食料の確保もあつて、移住を制限しマヌス居住地への出入りを禁じていたこともあつたが、知識が乏しく資金にも乏しかつた彼らの手を以つては産業の開拓においても、商業活動にしても見るべき成果を上げ得なかつたのは当然のことである。天明の初めに書かれた東遊記にも、

津軽は人の生れつき拙きにや、隣国ながら古来津軽のものに店を出すもの一人もなし悪事などありて処を逐はれ、又乞食などするもの、多く津軽の人なり。土地の者にも廻船向壁・材木など商う者に、少しは富裕の

者ありといへども、他國の人には及ばずという。」（北海道史才二巻から引用）

と云へていることから凡そ推察されるところである。しかるに慶長、元和年間から近江商人の勢力が漸時及んできて、交易、産業の開拓に着手したのであり、寛文の頃には確固たる地位を築くに至つたものと推察される。即ち、寛文九年の蝦夷の叛乱に際して、商人から、當時の家老坂崎藏人に見舞を出し蔵人はこれに手紙を書いていることが左証である。（北海道史才二巻所載（桺川共右文庫））

近江商人の他に加賀、能登、越後、佐渡、出羽等の旅人並びに土着人の勢力もあつたが、彼らの勢力には遙かに及ばなかつた。それは近江商人はその商才と忍耐力とにおいて、他國商人より勝つていたことも考えられるが、彼の蝦夷渡来は古く、人数も多く、その団結も固く、加えて藩との交渉も密接であつたことにある。

松前の地は生活必需品全般に至って、本州に仰がねばならぬ環境に置かれていたが、彼らの渡来によってそれが充たされ、又彼らが松前の産物を各地に運ぶことによつて、販路が拡張されたのである。又、漁業、伐木等の産業も彼らの豊富な資力によつて開發されたのである。しかし、他面これら商人勢力が拡大するにつれて松前封建制の内に大きく侵蝕していき、封建体制の崩壊の一要因となつたのである。

商業資本が早くから喰ひこんで行つたのは交易の面においてであつた。前述した知行主の蝦夷交易において、松前側から持つて行く品物も皆本州から彼らの持来りたものであつたし、交易して得たものも殆んど本州市場で売却される状態にあつたから、藩及び知行主の交易行為はいわば、蝦夷産物の集荷人に過ぎないものであつた。この事は武士の商行爲であり、交易が大規模に成り、商人の勢が盛んになると、到底彼らに太刀打ち出来なくなり、資本面においても技術面においても、行詰りが生じたのである。その結果、商人に債務を負つてその返済に苦しみ、場所交易の權利をこれに預け、その使用料を返済に充てるものが現れてきたり、又商人に請負わせてその料金を収めるほうが安全かの便利なことに気づいて、これを商人に任ず藩士も出てきた。かかる方法は一應者にとつて甚だ都合なことであつたから次第にこれが行われるようになった。遂には藩の直領地にまで及ん

でいる。この商人を場所請負人といひ、場所交易を請負う料金を運上金と呼んだ。交易を行う家屋を運上屋と称へている。藩主の直領地交易には特に上乗として藩士を遣わすことを慣例としている。請負人の起つた年代は明らかでないが、十代矩広の頃（寛文五年から享保五年）とみて誤りがなく、直領地が全部請負人の手に渡つたのは十二代寛文の時（寛保三年から明和二年）らしい。

請負人は知行主に対して、請負期間、運上金を定めて場所を請負つたのであり、その契約も対頭名のものであつた。請負人は又、多く知行主に対して日常の必需品を供給したり、金銭を融通したりして、年末に存つてかり運上金と差引計算をしたらしいが、これは知行主にとつて頗る不利なものであつた様である。地比富該は次の様に記している。

采地の收納、穀にもあらず、魚にもあらず一地を百金、二百金として商人に任し置くのみにて、一金も手に入れ、囊に納るものなく、日用の品は悉く彼商人よりとりて出入用に供するものゆえに、利に飽かざる商人、一年の供する諸色、十を百とし、百を千として其価値のままに記し置、歳尾に至り之をしらべ、総計を以て多少をいふに土人の方にては、時去り日移りて、夫まで用すてたりし物の善悪をわすれ、いか程の価にて夫に應ずるといふことも改めまらざれば、只商人の記録せるままに処置するが故に一年の衣服調度の価と、

禾地の運上とは相違して、多くは土人の債となりぬること、人々の良く知る所なり。」「北内叢書所收、大原金吾が寛政七年松前に招かれた時の状況を記したものの。」

これは稍誇張が大きすぎるくらいはあるにしても、両者の關係を推察するに足るものである。

かくして、請買人は場所の交易權を手中に收め強大な資本と機敏な商才をもつて蝦夷地に活躍すること存したのである。彼らは自己の運上屋に支配人、通詞、番人を派遣して交易を行い、かつ産物を増加させるために蝦夷に漁法、教えたり或は嚴禁されている蝦夷を使役して漁業を営む者まであらわれるに至つた。即ち、鮭、鱒、鱈、鱉などのように季節的に大量に押寄せてくるものは大網舟<sup>①</sup>と使つて大規模に漁獲する必要があり、人手を要するものであるから勢い蝦夷を使役することになるのであり、又蝦夷らの幼稚な漁法をもつては太刀打が出来ないものだから、その期間だけは報酬をもらつて請買人に使役されたのである。これが後に締粕<sup>②</sup>の製造が始ると、この傾向は一層強くなつた。然して報酬も前賃制度をとるようになつてからは差引勘定で、出来るだけ蝦夷に負債を買わせ、翌年も又働かせるように仕向けているのである。又儲け主義に徹するのあまり、交易に不正を用いるものもあらわれてくる。例えは「夷人より昆布三尺繩にて一丸<sup>③</sup>にからげたるを二把差出したれば、親桃に冷飯一

盃と取りかえるをみたり。鮭、鱒、鱈、鱉もこのふり合也。甚不都合の交易というべし。これは当所にも限りず、夷地帯帯この通りなり」と云つた事や、元禄元年に水戸藩の快風丸が石狩に於いて行つた、玄米一斗二分入り一俵で生鮭百尾<sup>④</sup>が常法でありたのに、宝暦の頃には一俵が八升入となつた事や、「蝦夷拾遺」で蝦夷が珍重した鉄先のことを「思に昔の商人、甲の鉄形を武士の頭にいたはく賣家なりと教え、売りにて高利を取、名も鉄先と付たるなるべし。其器各不同、頗る鉄形に似て、斬しきは木を以つて作り銀を以て文置る物多し」と述べていることもそれを窺うに足るものである。又、蝦夷国私記にも「酒は秋田の大山という所より造り出し、式斗樽と申て一斗四升位有。(中略)其酒一体生酒にて色赤く、夫へ水を調合致すなり」とみえ、更に着古の抱襦袢、金糸入などの派手なものに裏へは白色水綿などをつけて、小袖のように仕立てたり、又祭衣裳など立派に見えるものを持つていつて、交易の際に「風呂敷へ包、少し見せて隠し置を、蝦夷人見て結構なる品に見ゆる故、至て好品々、交易の品を持来りけるを、中々夫斗りにては取替申かたしと段々品を増し、漸交易すると云つた状態だつたのである。」「北海道史より引用」斯様な手段を用いて増々場所へ浸透していつた結果、天明六年当時には彼らの請買場所は西蝦夷地に四十、東蝦夷に三十八場所合計七十八場所もあつたし、その運上金も西蝦夷地で三十九百三十

二面、東蝦夷地で千五百七十八面、合計五千五百十面に  
なり、幕主収収がアツタ、マシケ兩場所の切替塩引運上  
式百兩を加えて千八百三十二面、藩士の分が三千六百七  
十九面となる程であつた。因みに天明四年松前勘定奉行  
の老中に提出した書類によれば松前藩の収入は凡そ次の  
通りであつた。即ち、

越前村木運上

凡金千五百兩程

薩摩船出入荷物口錢（江戸船）

同 五千兩程

鮭、鱒、昆布其外漁獲

運上役金共

同 式千八百兩程

長崎俵物運上

同 四百兩程

蝦夷地の内他國ものえ

渡候諸運上

同 四百六十兩程

都合壹万式百六十兩程

但年により、廻船の入津数により、都合壹万式十兩  
を取立候えは當時宜敷方の由

であり、当時の藩収入は壹万面から壹万式十面の間でそ  
のうち蝦夷地運上金は三千六百六十面であるから全体の  
三割七分が三割の間を上下したことになる、蝦夷地運  
上金の松前藩財政に占めた位置の大きかつたことが推察  
されるのである。尚、蝦夷地の内他國ものえ渡した  
場所の運上金は飛騨屋久兵衛の分であり、小林屋宗九郎、  
鹿比須屋久次郎、熊野屋新左衛門の分が脱けているので  
あるからその総額に占める實際の割合はもっと大きなも

のでありたと云え、商人が場所請負において、いかに巨  
利を得ていたかを推定する傍証とするに足るところであ  
る。即ち、前述した如く、場所請負の運上金も前貸制を  
行つたために知行主が差引勘定で負債を賣っているところ  
であり、それを漁民、アイヌにまで拡張して、資本、  
生産手段、生活必需品の前貸を行い、その漁獲物を一半  
に買集める向屋的高利貸資本として支配を及したのであ  
る。従つて、貸付金の利子は三十一・四十%をとるのが  
普通で、生産物の売買においても四十%以上の純利を占  
めていたということも強ち否定出来ないところである。

## 2. 森林伐採の請負事業

松前藩創業前後において、藩財政を支えたものとして  
採金の事業があつたが、これも同様に産絶し、之に代  
る戦源として開発されたのが、当時から豊富に存在した  
森林開発であつた。就中、江差の松山と呼ばれる上國天  
川から厚沢部にかけての山林は羅漢拍（あすなろ）の良  
木が繁茂していて恰好の場所であつた。従つてこの地の  
羅漢拍の需要があつたことは、寛永十六年（一六三九）  
福山城の修築に際し、材木は悉くこれを用いたことによ  
つても知られるところである。又松山は上國目名、戸渡  
川、古樫、豊部内、田沢、厚沢部目名、羽板内の七ヶ所  
に分れていたが、津軽一統志（寛文九）に「松前松木山、  
当年は三四万杓取仕候由、上國之メナリト川兩川江出

候由「水少分は而不自由」とみえていて、既に当時、上  
國名、戸渡の両所が南かれていたことが知られる。又  
延宝六年（一六七八）には厚沢部を開放して、山師に伐  
採させ、之を他国に出す事を許し、松山奉行において管  
理させている。松前藩では山林の保護に意を用いていた  
ことは次の制札からも窺われる。

一 材木川流之時分ノ、リ木、竝マライ引申向敷候。夏  
冬トモニ川荒申向敷事。

一 山中ニテ、何ニヨラズ売買仕向敷事。

一 材木ヌミ申看有之ハ、過料金可申付事。  
（其木店ニテ買事）

一 苗山之木伐申向敷事。

一 垂所江無断松皮ハキ申向敷候。附惣テ松小木一切伐  
申向敷事。

一 野火付申向敷事。

一 廻番持参不仕拙雇申向敷事。

右之旨於「相背ハ、急度可申付モ」也。

延宝六年二月七日 此札ハ江差江立ル

（北海道史才五巻資料所収、松前制定の部から引用）

かくて他国から山師が盛んに来て伐採し、木材、寸甫、  
板材等として之を移出した。ところが、元禄八年四月山  
火に罹つて立木の過半を失い、以後この事業は非常に衰  
退した。延宝二年（一七四五）有名な山師飛弾屋久兵衛  
は五ヶ年の期間で上國目名の寢木、埋木、枯木の拙取を  
請負い、その運上金貳千三百両であつたという。この松

山の衰退に代つて登場したのが飛夷松と呼ばれたエゾマ  
ツであつた。飛弾屋に残る文書によれば、享保四年（一  
七一九）に有珠山麓付近で伐採の許可を受け、元文年間  
（一七四一〜四四）にその奥の尻別山麓に手をのびし、  
ついに厚岸山に及んだという。次いで宝暦年間（一七五  
一〜六四）には石狩山林に着手している。伐採人夫は下  
北半島大畑在の拙夫を集めて、夏から秋の間に伐採して  
谷川附近まで運んでおき、春の雪解けを利用して石狩川  
口迄流して船で江戸、大坂に積出していた。久兵衛は一  
ヶ年千両の他に献金等をしてこの事業を続けていたが、  
切羽により明和四年に遂に山を返納している。その後、  
江戸材木商新屋伊藤久右衛門に借金形として年千両  
一万石の伐採高で請負わせたが藩では約束を履行せず、  
公訴されたこともあつた。又前述の飛弾屋久兵衛の公訴  
もあるが、いずれも伐採請負に關する貸金問題が原因し  
ていて、松前藩の財源がこれら商人からの借金で穴埋め  
されていたことが推察される。飛弾屋の公訴の場合、国  
後ほか四場所を一ヶ年運上金貳千七十両の割で安永三年  
から二十ヶ年間請負せることとなり、これが後に寛政元  
年の飛夷叛乱の原因を作っている。

木材には他に松を除いた外のを椎木といつて、一  
定の礼金を納めれば何人でも自由に伐採出来るものがあ  
つた。即ち、明和九年五月の藩令に「不限自他、飛夷地  
東西遠近之無差別、木は松之外何木にても勝手次第に候。

尤定之通札金可爲差出事。」とみえているが、後には松のほか松、樅、桂、朴、しころ、杉の七種のは江差山師並びに諸貢山師以外の者の伐採を禁じている。

### 3. 向屋の発生

松前の産物が始め敦賀、小浜の両港を経由して琵琶湖に入り、更に京畿地方に移出されていたのであつたが、寛永井向加賀藩が大坂に米穀輸送を行つてから西廻り航路が開けた。(古田良一博士著「日本海運史概説」)これによつて、本州との交通が盛んとなつたことが明らかである。従つて松前を始め、江差、函館等の湊には商船の出入も以前に較べて頻繁となつたのである。商船の出入の繁しさは一面商人の活動の場となることが必定であつて、そこに向屋が発生することも商業上当然のことと云える。松前においてもそれがあられ、享保七年(一七二二)十二月、福山向屋業者が株式を出願し、許可せられて始めて特権を有する営業となつたのである。江差にも同様の向屋株があつたが明かでない。

向屋は諸国から渡来する商船に宿を提供し、船側と松前住民との間に立つて商取引の仲介を行つて、口銭を得るものである。移出入の貨物は向屋から番所に届けられ、沖口口銭その他の諸役金もここを通して支払われる仕組みとなつていた。向屋の義務としてこの他にも難破船の救助や禁制品の取締等があつた。諸品の売買口銭の他に座

敷、蔵敷等があり、その貨物によつて一定していた。但し蔵敷は在庫日数の長短に依らず、一ヶ年以内は皆同額で、越年すれば二倍とすることになつていた。次に諸品の口銭の定料金を掲げる。

#### 諸品売買口銭

(福山沖口諸役控 並向屋儀定控) 一諸色売口銭二分  
一酒売口銭四分 一諸色買口銭二分半  
一生鮮・細布・江ざし昆布・わかめ頭巻四分  
一青物四分(定口銭とも) 一小向物三分(定口銭とも)  
(函館向屋儀定書) 一諸色売買二分 一酒四分  
一鉄物類三分 一材木板類四分 一瀬戸物類三分  
一鯨・鰯類三分 一青物類四分(蔵敷なし)  
商人が士族や漁民に前貸を行つて、これから利子を徴収していたことは前に述べたが、漁民に就業資本は勿論のこと日常生活費まで前貸しを行い、漁獲物を商人が集めてその売上高より元利を引取る方法はこれを仕込あるいは仕送りと呼んたのである。その金利を明和五年以後の藩令からみると、

#### 寛

一金錢貸方利息之儀、正金拾兩に付金々月金一歩、又は拾五兩・式拾兩に付金々歩、尤大金貸入之節は金三拾兩に付金々歩迄に可致候。尤銀夷地仕込の利息並轉取船仕込貸之儀四割之積、割之。

月十二日

(松前福山諸役)

であり普通貸借は年一割五分から三割一なるし、仕込金利については四割に達しているから相当の高利であつた。東遊記にもその有様をのせているから、それによつても當時の向屋制の高利貸資本の勢を窺ひ得る。即ち

「地方のものの仕送りにより、金・銀・米・塩等いささかの物にてもことごとく仕送りもらひ、人を雇ひ、船を持ち、二月彼岸過難嶺致し、何程得ものを有ても仕送りの方へわたしめれば、仕送り之仲間より合ひ、売買をたて、たとへば正月に用立二月に返済するも、惣高にて三割の利を加へて、算用を相立るなり。儀定といふ借方は利足二割なり。これは家藏地面など書入れ借受くる故利足やすしといふ。是に商物の利分式割をかけぬれば、五割程の利足なり。是によりて他回の商人暫時に富貴になるもの多し」

といふのである。この文章は先の藩令と照合してみても當を得たものといえよう。この他に貨物の規定、為替などもあつた。すなわち貨物ではその期向大ヶ月以内は一ヶ月利子四分とし、火難、盗難に会つた場合は両損たるべしこと、貨屋の外は何人なるとも貨物を取りざるべきことなどを規定している。為替は有力な商人は松前と江戸、大阪その他主要地に店舗あるいは取引先をもつていたので、為替には都合がよかつたものとみられる。

本前では通貨として砂金が用いられたこともあつたが、普通は金貨を用いている。銀貨は通用しなかつたと云わ

れる。

## 二 蝦夷の叛乱とその原因

前章において商業資本勢力が、場所請買をその拠点として松前封建体制に侵蝕していつた過程の概略を考察したのであるが、一般的に及び我國における商業の発達は武士階級の生活に寄生的依存をして進んできた場合が多いのであつて、このことは土地経済を基盤として行われる封建制が貨幣経済への転換を内包していた一都市発達に伴う消費経済への進展の必然性であり、そこに商業発達の要素を見いだすことが出来る。従つてこの一般的法則が松前藩の場合にも見られたのは当然のことである。加うるに松前藩では創業期から既に土地自然経済の手段がなかつたために、いち早く貨幣経済の渦に卷込まれたものと云える。又、参勤交代やその他武士の平時の豪奢な生活のために起つた藩経済の膨脹は商業資本への依存度を増したものとみてよく、この武士階級と商業勢力とが相互依存しながら貨幣経済を進展させたのであるが、松前藩の場合、これが藩主と商業資本との間の關係だけが急激に進み、その歪みが漁民の窮乏、蝦夷への圧迫となつて下部層に波及した。この章ではその生起せしめたものを考察しようとするのである。

## 1 寛文九年の蝦夷叛乱

寛文当時の蝦夷地は交易に依り和人とその項において  
金の重要な財源となっていた。砂金の採掘と鷹狩り従事す  
る者の出入が盛んになっていた。就中、鷹打は山野を歩  
き廻り、窟を蝦夷の部落に求めながら獲物狩を行つてい  
たこともあって、蝦夷との接触も密接であった。中には蝦  
夷の娘婿となつていたものもあったほどである。かかる  
和人と蝦夷の接触状態のうちに展開されたのが、寛文九  
年（一六四八）の蝦夷の叛乱であつた。

もともと、この乱の契機となつたのは慶安元年、東蝦  
夷地の米返蝦夷（メナシクル）と波恵の蝦夷（ハエクル）  
との衝突である。メナシクルの酋長がハエクルの酋長  
オシネベシのために殺されたことからメナシクルの副酋  
長格であつたシヤムクシヤインがその後をうけて十三年  
の長年月にわたつて争いを続けていた。明暦元年、松前  
藩では藩士を遣わして和解させたが、その後も勝つたハ  
エクルが何かにつけてメナシクルを圧迫し、遂にシヤム  
クシヤインはオシネベシの縁者を殺すに至り、オシネベ  
シはシヤムクシヤインの咎を攻めて大打撃を蒙らせたの  
である。ここでシヤムクシヤインの砦下に居を構えてい  
た採金取の頭目文四郎なるものが藩の許可を得て、仲解  
に入つた。そこでオシネベシが文四郎の居所を訪問した  
のであるが、シヤムクシヤインがこれを窺て、一挙に攻

めて彼を殺したのでハイクルの殘党はシヤムクシヤイン  
の砦を攻めるが逃してしまい、逆に彼のために砦を焼か  
れ、ここにハイクルの惨敗となつたのである。そこでハ  
エクルは松前に使者を遣わして援助を乞うたが、前例に  
しとして受つけられず、やむなく帰つた。しかし翌年、  
再び使者を遣わしてきたので、藩では飛脚を遣わして、  
両者に和解をさせたのであり、留めておいたハイクルの  
使者に米酒を与えて帰したが不幸にも疔瘡にかかつて死  
んだ。それでも乱は納つたので、交易を止めていた商船や  
鷹匠らも何年の通りに入つて行つた。ところが寛文九年  
六月、蝦夷の大叛乱が突如したのである。これはシヤム  
クシヤインが度々の危難を傷一つ受けずにメナシクルに  
勝利をもたらししたので部下に尊敬されていたのを利用し  
て当時幼主（矩方十一才）を戴き、素乱していた松前藩  
を破つてこれに代るうとした鷹打庄右衛門やシヤムクシ  
ヤインの娘婿庄太夫りの画策があつたといわれているが、  
又、一説には仲介に入つたものがシヤムクシヤインの真  
意を松前に伝へなかつたので、松前藩の措置は一方的に  
ハイクル側に有利だつたのにシヤムクシヤインが不満を  
もつていたともいわれている。それはともかく、先に疔  
瘡で死んだハイクルの使者を松前藩が毒殺したのであり、  
蝦夷全部を毒殺しようとしていると、先ずハイクルを喰  
かし、同時に東西の蝦夷に使者を遣わして同様に煽動し  
たために遂に各地の蝦夷がこれに呼応したのであるといふ。



この乱には東海岸では長万部から白糠迄の蝦夷が、西は歌棄から羽幌迄の蝦夷が加つてゐる。義往は東海岸では商船八隻、船頭、鷹打ら一五三人、西は商船十一隻、人等一二。人、合計商船十九隻、和人は二百七十一人に又んじという。(北海道史才二巻の記述による) この乱はいかに近境の地に起つたものとは云え、島原の乱以来の大規模なものであつたらしく、松前藩からの報告によつて幕府は津軽、南部の両藩に後詰を命じてゐる。松前藩は固陋に防備線を張つて喰止めたのであり、津軽藩は太宰村で沸出、南部藩は野辺地まで兵を進めた所で鎮した。この乱を契機として津軽藩では隠密を蝦夷地に収めて状況を探らせてゐるが、このことは蝦夷地の状況を相当明確にしたものとして貴重な行為であつた。津軽一統志という書物は寛文九年当時の蝦夷地の状況を可成詳しく記述してゐるのもこれらの行為があつたからである。

さて、松前藩の蝦夷の皆殺計画如きの情状で何故にこのような広範囲に渡る蝦夷の蜂起があつたか、については蝦夷の和人に対する不満をあげることが出来る。叛乱の翌年、前記津軽藩の隠密が積丹半島辺まで行った時、彼の地の蝦夷は叛乱参加の理由を、色々とあげてゐる。

何えは美<sup>ミ</sup>回<sup>ヘ</sup>の酋長は

松前殿御仕形も総じて悪敷御座候。米二斗入の俵も只今とは八升ばかりづつ入り、大分に押賣被成候。其

上俵物にあたり束見の一束もたり不申候得ば、束年は二十束にてとられ、出し兼申狄は子供賣にとられ申候とのべ、尻深の酋長も

(代官より代官)

去年拙者共殺申候子細は、前々志摩守様御代には、米二斗入大俵にて千疋五束宛御取替被成候。近年蔵人仕置罷成、米七八升入にて千疋五束づつに御取替被成候得共、狄共之儀に御座候得者、不<sup>レ</sup>及是非其通に差上申候。(中略) 近年あじ商に松前より御越候に、拙者共取候川にて大あみおろし、鉋すき御取、上方へ船に御越被成候に付、左様に被成候では狄共取申候鉋無御座候間、渴死申候間、拙者共に取らせ御買被下度由色々御訴訟申上候えども、松前の知行所にて候間、取申に我儘申候とて、御たなき、其上にも拙者共取申鉋やすく御買上被成候えは何か迷惑仕候。

と云つてゐるが、交換比率がたんだんと蝦夷に不利となつていくと共に交易に従う和人の態度も圧力的であり、蝦夷の漁場まで侵害するに至つてゐるのである。現場における商人達のごまかしや強圧的態度に加えて知行所役人も蝦夷の訴えに耳を貸さうとせず、現場と呼応して蝦夷を搾取、侮蔑の中に押込んでいたのである。又続けて次の様にも云つてゐる

余り迷惑に存じ、近年は度々御訴訟申上候得共、年寄たる狄共我儘申候間、毒の酒にて年寄蝦夷の分御たべし、若狄斗に可被成御相談にて、はしくにて右之酒

にて拒果候由、及承候。尻深の秋共氣遣に存、御酒も不申候、由モケ様に御にくみ被成候ては、未に御たやし可被成由承り、就夫シヤクシヤインモ商船殺申候由承り、上ノ国とても逆も逃れぬ事と存じ、シヤモ船殺す候。

一 此に述べているようぢやかしと虐待にあつて、和人を殺しているところに皆殺の情報が入つたわけで、彼らにとつては主が死かの差迫つた状態におかれてゐる如くに明したのであり、これを以つてもいかに和商人が蝦夷を喰ひものにしてゐたか、又いかに支配勢力が威圧的に蝦夷を扱つてゐたかを推察してあまりあるところである。この乱はその年の八月に一施鎮定はしたものの、東西両蝦夷地の大半に亘る大きなものであつたから、尚翌々時まで地域的に鎮撫して廻らねばならなかつたのである。而して最早、意氣沮喪した蝦夷はこれ以上の抵抗を試みる者もなく、争つて償いの品を出して降服したので、蝦夷から誓詞をとつて、寛文十一年に至つて全く叛乱の終結をみた。

#### 起請文の事

一 従般様如何成儀被仰懸候とも、私儀は勿論、孫子一門並うたれ男女に不限、逆心仕向敷事

一 般様え逆心企申致御苦勞に罷成儀等申夷及承候はば、随分竜見仕、其上承引不仕候はば何卒通路罷成に於ては早々御法進可申上候。附、仲向出入御座候はば、

随分面々及争立申儀候はば、取扱可申事。

一 般様御用にて、しやも浦々罷通候は、少も如在仕向敷候。縱令しやも自分の用にて廻り候とも、随分馳走可致候事

一 御鷹待並金堀に少も如在仕向敷候事

一 従般様向後被仰出候通、商船へ找儘不申懸、互に首尾能商可仕候。余所の国の荷物買取申向敷候、我國にて調申荷物も、股の国へ持参仕商売致向敷候。人の国にて取申候處、干鞋我國へ持参仕売買致者跡々より仕付候通可致候事

一 向後米一俵に付皮五枚、干鞋五束商売可仕候。新物、煙草、金道具に至るまで、米に依じ、跡々より高直に商売可仕候。荷物深山に有之年は一俵に皮類も干鞋も下直に商売可致候事

一 般様御用にて状使並御鷹送申儀、其外伝馬宿送昼夜に不限少も如在仕向敷候。御鷹の餌犬あはひ出し不申候共、無遅々出し可申候事

右之旨私義は勿論、孫子一門並うたれ男女に不限少も相背申向敷候、若相背候者於有之は、神々之蒙御罰、子孫長く絶果候。依て起請文如件（北海道史才二卷から転載）

かくの如く、蝦夷の全面的な降服を意味するものであつた。而して、この乱を契機として場所請負制は急速に

發展して行つたのであり、蝦夷は増々服従と虐待を強いられることとなりたのである。又この乱を松前藩側からみれば、乱鎮定に費した経費は多大なものであつて、この時期の前後に頻繁に起つた天災飢饉、或いは城主の連統地位に伴う藩紀の弛緩から生じる浪費が重なつて財政難を招いたのであり、前述した如く領主直支配の場所も諸奥商人の手に渡る期を早めたのである。この後、十一代邦広の代（享保五年から寛保三年まで）に入つて、昆布決役、薪役、難取役、酒役、漁油役、穀物役等の新税の新設と徹底した倭約令により幾分の財政的余裕を出じたのであるが、これも一時的なものであつた。即ち明和以後には又財政難が頭をもたげてくるのであり、商人からの巨額の買債を返済することが出来ず、商人等の公訴となつてそれが現われるのである。飛騨屋久兵衛に因縁、外の場所を二十ヶ年請負で小村屋宗九郎の立替金返済のために石狩秋味場所を二十ヶ年の期限で引渡したことがそれぞれである。

しかし、かかる状態は一人松前だけのものでなく、幕府においてもみられるのであつて、すなわち、邦広の緊縮政策は享保の緊縮政策に沿つたものとみるべく、明和以来の財政難は田沼執政時代の幕府の財政難時期に符合しているところである。この頃の全国的な経済情勢を見渡す時、高利貸付資本の金融市場支配、武家財政との完全なる依存関係はもはや動かすべからざる事実となつて

いたのであり、松前藩における商業資本と藩経営との関係もその一環をなすものとみるべく、同屋資本の諸回産業への進出、商品流通量の支配も亦、飛躍的發展を遂げた。之により、固定せる幕藩体制との矛盾が激しくなつたことも必然の成り行きであつた。それが社会的動搖と政治的危機の原因として武士支配階級を悩ます問題であつたのであつて、前述蝦夷叛乱に於てはその趨勢の萌芽が災となり、乱後の松前封建体制内に着実に根を据えたものと云えよう。

## 2. 因縁、目梨の蝦夷叛乱

寛文九年の蝦夷乱においては東西両蝦夷地の広範囲にわたつて、蝦夷の蜂起を惹起せしめたが、蝦夷地全体からみれば、いわゆる口蝦夷地であつて、奥蝦夷地のそれはこの乱に参加していないのである。このことはまた奥蝦夷地には知人勢力が進出しておらず、ために両者の接触による和人の圧迫が感じられていなかったからである。而るに元禄十四年霧多布場所が開かれ、宝暦四年（一七五四）には因縁場所が開かれるに及んでようやく両者の接触が激しくなつていつたのである。しかし、この方面の蝦夷は非常に剛強であり、未だ蝦夷地社会の自由さが残つていて各自勝手な振舞をなし、時折不穏なことも起つてゐる。即ち、元文二年に霧多布の蝦夷が騒ぎ、交易断をとめたことや宝暦八年には根室方面の蝦夷が糾

軍方面の帳表を襲つて数十人を殺した事件があつたり、  
 安永四年（一七七五）には国後の乙名ツキノイが醉狂に  
 に任せて諸貢人の荷物を横領したので、天明二年まで支  
 費の滞達を止めたりしたこともあつたのである。北海  
 道に「把じて東蝦夷は剛強にしてやぐもすれば松前の  
 等を殺にせり。キリタツ、アツケシ、クスリは別而  
 奪取六ヶ敷なり」と語り、天明三年（一七八三）の東  
 道記にも「東の蝦夷は豪強なり。拙なく愚なる様なれど  
 も、死を極めぬれば甚だ心剛なりと云へり。あしく坂い  
 る後々に心ひがみて害あるべしと思はる」と語ってい  
 ることからも、東蝦夷でも奥の新しい場所のそれはまだ  
 蝦夷李末の剛強さが残されていたことが知られる。

剛強な蝦夷の狀態が当時の霧多布以東の蝦夷地を支配  
 していたのであるが、そこに東込んでいったのが、安永  
 三年（一七七四）松前藩への貸金の肩代りに藩からクシ  
 ロ、アソケシ、キリタツ、国後等の場所を請負った飛  
 騨屋久兵衛であつた。彼は積極的に各場所を開き、蝦夷  
 を使つて綿糸の製造を行い、利益をあげることに努めた。  
 しかし、この功利一本槍の経営方法は蝦夷使役の仕方に  
 無理を生じることにちり、前述の如き自由な振舞をなし  
 ていた蝦夷を怒らせ、寛文九年以来の蝦夷の大乱を惹起  
 せしめたのである。

蝦夷の誘貨は極めて安いものであつたが、とりわけ国  
 後、目梨地方のそれはひどかつたのである。何えは当時

の綿糸製造に従う蝦夷の産物は

長人	米又は麹	二十俵	煙草	二十把
男夷	〃	七、八俵	〃	二十把
女夷	〃	五俵	〃	十把

であり、製造された糸は全部運上屋がとり、魚油は双方  
 で折半するのが習慣であつた。

ところが国後、目梨地方は頗る条件が悪かつた。即ち、

長人	国後	米麹	三俵	煙草	三把
男夷	国後	〃	一俵	煙草	三把
女夷	国後	〃	一俵	煙草	三把

であり、国後のある地方では降雪の頃まで働いても雇代  
 がもらえず、彼らは冬季の食料を凍傷し、貯蔵する暇が  
 なく、甚だしく困窮した。中には餓死したものもあつた  
 という。又その使い方も極めて乱暴で乱の鎮定に行つた  
 藩士に厚辱の小使が「右油メ方に仕、シベツる名女房不  
 働候へば、移方番人共の内には、割木を以て打候は、病  
 氣にちり、向も方く相果候」といつてゐるが、又「其番  
 人共の内にて申候様、不働候程は当年より更ども不殘可  
 殺様申之、其御犬を鐐にて縛り川へ沈め殺候由。右の趣  
 御座候ゆへ、定て夷をも可殺と皆々堆量いたし候」とい  
 つてゐることからも、想像される。又番人のうちには、  
 殆ど独身が多いので、長く滞留するうちに蝦夷娘と通じ

る者も出てきているが、中には有夫の女を誘ふものもあつたらしく、「蝦夷地に往來する舟子など、蝦夷女を姦淫する事あれば、其女己が夫に告ぐ。其夫舟に乗りて其人を求め出して償の物を出さしむ。煙草など輕き物を添えて之を償う」という記述がそれを現わしている。これらのことは蝦夷をして不安に陥入れるに充分であつた。かかる不平不満が鬱積している時、寛政元年（一七八九）五月、国後場所の乙名サンキキが病床にあつて、使いを運上屋にやつて酒を買わせたところ、番人が「サンキキもこれが飲み納めだろう」と云つて渡してよこした。飲まずと向も戻く死んだのであるが、番屋から飯をもらつて喰べたメノコ一人も死ぬに至り、前々から番人に嫌はし文句を聞かされてゐる蝦夷達はいよいよ毒殺が実行されたと思ひ込み、大等して運上屋を襲つて、支配人、上衆役らをはじめ、通詞、番人等計三十二人を殺し、荷物を掠奪した。次いで目梨に渡つて、仲向を煽動し、番人三十八人を殺したのである。次に、ナウルイに停泊中の飛彈屋の商船を襲つて船頭ら十三人を殺害したのである。更に我斗を統けるべく墨を染いだしたのでが、有力者の執持もあつて止り、七月ノツカコスに着の鎭撫隊が到着し、投降した蝦夷を予審して首魁八人及び重罪の者三十七人を死罪にする事に決し、先ず首領八人を処刑した。又、獄中にあつた二十九人は役牢を破つて暴れたので、悉くこれを殺害し、蝦夷一般に対し、今日叛夷等不法の

所行があつたから、止むを得ず千々に訴へて是を討殺した、尚ほ異変がある時は直ちに征伐すべしと宣言した。蝦夷達は恐れて服従を誓ひ、殺意の無いことを示したので、乙名一同に次の様に申し渡し、善後措置を講じて引上げた。

此處之騒動等も、夷人所存とは乍中、支配人、番人共常々取斗不宣候故、不得止事起候趣にも御存候、然者此末は若不所存之者共有之候はば、直に御城下尤罷出訴候得者、夷人にも痛不出、番人共も善悪相分候前、物事大事に不及内に御取調被仰付候事故、向後右様可相心得候。右之趣一統らタレ共迄可申渡置候。右之段者得と可申渡候処、御用多く取込候而相違候。吳々右之系可相守申渡候。〔北海道史才ニ卷による〕

この乱の所にも幕府は津輕、南部二藩に松前藩が要求した場合は直に覆けるべき旨を命じているが、松前藩が独力で解決したので、出兵する迄には至らなかつた。この乱は蝦夷の最後の乱であつてこの後全く影をいそめてしまつたのである。而して飛彈屋久兵衛から國後、霧多布、厚岸、釧路、泉谷の五場所を取上げ、この方面の蝦夷の介抱を手厚くし、霧多布の運上屋を根室に、國後の運上屋をヲロケに移して漁業の奨励を行うに至つて不穏な空氣は全く靜まつたのである。寛政二年四月に幕府に提出した届書に、乱後の蝦夷地に肅する善後をよく現わしているのが次に掲げる。

## 蝦夷地改正

一 東西之蝦夷地場末之分は、以末旅人へ請買不申付、向後手船相立、家来を以介托爲致、蝦夷人帰服之儀才一に爲取計申候。

一 蝦夷地交易據方、是處は他領の者入支候之ども、以末場末蝦夷之分、領分百姓計差置、據方申付候。東蝦夷地アツケン・西蝦夷ソワヤと申所へ、番所建立、番頭並待、足輕差置、蝦夷人行跡万事取締、勤番申付候。尤至て寒強く、殊に氷海に相成候土地柄にて、冬中越年難相成、依て蝦夷人半死等厚く致し置、交易據方之者共、不殘爲計取申候。尤當番より家来差置、異國境迄駕と見分の上、連連取計方も可有之奉存候。

一 東西の蝦夷地番所の外にも、最寄宜土地へ番所建立、猶マ家来支配の蝦夷地迄、制度相守候様申付候。

一 外國之儀も有之候向、以末は別て武備專要に申付、万一急変之儀も有之候節は兼て烽火を所々へ築置、早速注意有之候様に、爲取計申候。

前書之通改正致し、此外も直境の蝦夷並嶋々異國境迄、連年家来差置、地理、方角、人物等も、駕と見分之上、取計方も可有之奉存候。以上。

戊辰月

松前志摩守（北海道支庁二卷）

これは先の蝦夷乱に際して、背後にロシアの勢力あり

との風聞が伝つたために文中見るような改正を行ったものであり、當時南下し来つていたロシア勢力へ世人の眼が向けられるに至つたことを物語るものであつて、これが寛政十一年、東蝦夷地の上地へ連關するのである。しかし乍ら、届書に明らかにした蝦夷地直境の直接支配も、当時の窮乏せる藩財政ではどうすることも出来ず、支配の名目で商人村山伝兵衛に差配させることになつたが、實際は請買と何ら変わるところがなかつたのである。

従つて、この乱を招いたものは前述の如き向屋制の商業資本が松前封建体制の矛盾に便乗して發展して行つた結果であり、斷然自然經濟を基盤として成立する封建体制が貨幣經濟の発達に伴つて武家經濟の膨脹を招いた如き矛盾が商業資本をして、封建的下部構造への圧迫を強化せしめたことにあると見て差支えない。

## 結び

近世に入つて急速に發達を遂げるに至つた商業資本勢力は、本来自然經濟を基盤として成立した封建体制の内に寄生して發達した場合が多かつたのであるが、貨幣經濟の成長と相互依存的に武家經濟も膨脹して行き、寄生者たる商業資本に多くその利を貪られる結果となつて、概ね赤字となつて財政の上にあらわれ、それが封建的下部構造に顕著せられたのである。それが百姓一揆や災害となつて現われ、政治上の悩みとして支配階級に返つて

さている状態がこの十八世紀の一般情勢であつた。斯様な情勢を松前藩について見た場合、それは他の諸藩において、農民一揆としてあらわれたものが、ここではアイヌ蝦夷の叛乱であつたと認められるのである。しかして、その乱が勃発して鎮定される毎に和人勢力が一步一步足場を固めて行つたのがその実情であり、就中、商業資本の成長は他の諸藩より遙く始つたにも拘らず、その進歩は目ざましかった。而して十八世紀に入つては藩体制の中に喰入り、蚕食していつた商業資本は藩政を左右するまでに大きく根をはり、それが大抵、蝦夷松前の地に出た樺太の如くに勢力を築いていつただけに、その奪取手段において植民地的性格を充ちせているのである。従つて他の諸藩に較べて広大な領地を有する松前藩の統治はその基礎が東渡二万石程度の藩政では賄ひ切れるものではなかつた。

かかる情勢の下に、起つたのがロシヤの国境に出没の事であつた。ここに幕府が行つたのが、寛政十一年正月の東蝦夷地の上地であつて、内地においてようやく行詰をみせていた新田開発の新天地をこれに求めたこともあつたが、主眼となつたのは国土侵略勢力の防禦にあつたのであつて、前章までに見てきた如き、疲弊し切つた一弱小藩に持ちこたえうる問題に非ずとの判断からなされたものとみることが出来る。

#### △註△

①普通に使われていたのは刺網と呼ばれるもので網目に魚頭を縊らせて獲るのだが、これに対して大網とは曳網、連網等魚群を文字通り一網打尽にする能力を有する網を云う。

②主ににしくであるが、魚体を煮て脬と呼ばれる締具で水分を除いて天日で乾燥させたもの、窒素分に富む良食の餌料である。締汁から魚油がとれる。

③「新撰北海道史」に載せられているものから引用「蝦夷土産」寛政十二年著。

④鮭二十本を以つて一把（束）としているから五束のこと。

⑤五年・月の記載がないが、明和五年・十二年の法令の次に載せているから同年以後のものとみるのが妥当である。

⑥交易においてその基本は物々交換であり、交換比率を米であらわしているから換制的にはあつたとみることも出来るのであるが。

⑦蝦夷酋長の談話は高倉新一郎博士著「蝦夷地」（日本正史新書）から転載した。

⑧高倉博士前掲書から表に作製した。

⑨寛政四年木村謙次の「北行日記」中の文章。高倉博士前掲書による。